

～子どもが私を呼んでいる～

コロナ禍の子どもの心・本音と子育て

—教育相談活動(不登校・いじめ・発達課題)を通して—

2012・7・31 倉本 頼一 (京都教育センター・滋賀民研)

<はじめに・自己紹介>

戦没者遺族、貧困家庭に育つ、大学で綴り方教育研究会、北桑田4級僻地で分校教員、僻地・文学教育、京教組専従、宇治久世現場、非行、障害児教育、登校拒否、教育相談、いじめ問題研究実践、滋賀大学教育学部准教授、教育相談室・臨床教育研究、橋大・立命大で非常勤講師、現・京都教育センター、滋賀民研、教科書連、NHK連、平和遺族会等 <子どもの心・本音～子どもがよんでいる> (出典「作文と教育」「全国民研」綴り方の会)

1、コロナ禍の中の子ども

- ① めんどくさいが仕方ない
- ② 帰ってさんぽ
- ③～⑤ コロナと学校 6年作文から

2、生活格差、子どもの貧困

- ⑥ お母さん
- ⑦ なんでもうちは

3、友達関係に悩んで

- ⑧ 交換ノートのありがたさ
- ⑨ けっこう疲れる友だちづきあい
- ⑩ けんか
- ⑪ いやになってきた

4、不登校と子どもの心

- ⑫ いけた
- ⑬ 友だち
- ⑭⑮ お母さん

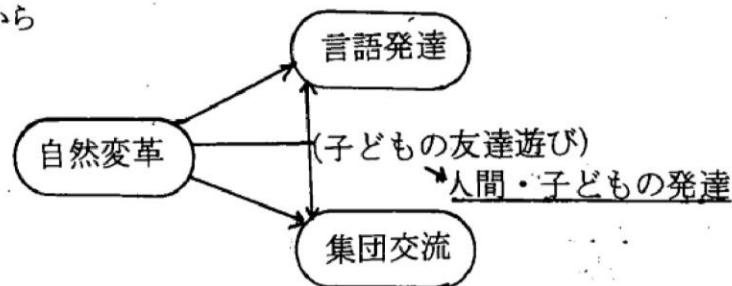
5、いじめ問題

- ⑯ けがれる あっちいって
- ⑰ 中学2年女子手記

6、子どもの自殺

- ⑱ 京都新聞から
- ⑲ これを読んでも時は

1 人間と子どもの発達



2 言語と思考の交差



3 体験と言語と行動・実践

1. 体験→イメージ→言語化→行動→認識と行動の一致
2. 体験を見る→再現行動 (まねる、感情的行動・模倣的行動)
3. 映像間接体験→知識→体験・実践なしの知識 (言語認識弱い)
(TV づけ・オンライン映像のみで放置)

<コロナ禍の学校・家庭の変化と新たな不登校の問題>別紙

1、子どもの現状・思い から

「7時間授業」子どもの心・本音

2、19年度不登校京都府内8年連続増加、全国では過去最多18万人

京都 小学校970人 (34、3%増加) 中学校 2430人 (6、7%増加)

3、子どもの自殺 全国は過去最多 476人 コロナ禍の昨年「休校明け増加」

「虐待被害最多 2172件 京都府内いじめ14%減 9475件

女子高校生自殺 138人、倍増加、コロナ禍長期休暇明けの6月8月に多かった

原因・動機「うつ病」精神疾患や「進路」「学業不振」が多い。

子どもの自殺で「いじめはなかった」で済まされない。重大な問題

「いじめ件数」各学校・教育委員会で「いじめの基準」違い、単に件数比較は意味ない

4、不登校が増え続ける中で、コロナ禍の社会・学校・子育て家庭の変化

- 1、子育て、生活困難な家庭が急激に増えている、特に一人親家庭、大変、援助必要
- 2、コロナ感染の不安、精神的圧迫感→うつ病、精神疾患→子どもへの影響
- 3、親の生活困難→子育てイライラ→虐待の増加、教育力低下、オンラインの負担

5、学校・子どもの変化、「三害」防止は、子どもの「発達要求」と逆行(図1-2-3)

- 1、「三害を避ける」指導をしなくてはならない教師の苦悩と子どもの息苦しさ大きい
- 2、「オンライン教育」で宿題・家庭学習負担課題が増加して、家庭の経済格差が「新しい教育格差」を生んでいる。

とりわけ小学生は「見守る親の余裕」保障できないと「学力格差」が心配になる
行政・政府は生徒に「機器」を配布し、援助の先生を増やしてない、格差広がる

- 3、休校中の授業時間を取り戻す→6・7時間授業、詰め込み、休み時間短縮、「息苦しさ」「しんどい学校」→学校嫌い増やす

- 4、子どもの学校生活が制限され 余裕が減っている

新指導要領で「授業時間数増やさず授業内容を増やす」→詰め込みになる

「個別指導を強め伸ばす、協働(深い思考)を進める」←無理な要求

子ども「早く学校始まって」→やっぱし学校しんどい

- 5、今 新たな学校恐怖・不安・友だち関係困難、家庭生活困難、新たな「不登校」問題

<この困難をどう乗り越えるか?この子育ての悩みをどうするか?>終わりに

1、学校担任相談、教育相談、カウンセリングで子育ての悩みを個人「相談」する。

まず、学校・担任・教育相談に「聞いてもらう」、学校外の「教育相談所」へ(個人) 精神的つらい時→気軽に「カウンセリング」を受ける。対話で「自分の答え考える」

2、「学校の教育懇談会」に出る、「地域や近くの教育懇談会」「親の会」に出席する

学校・担任への要望、「率直」に伝える。自主的な「親の会」に出席する。(集団)

3、行き届いた「教育」一人ひとりを大切に「少人数教育」実現の(運動)参加。